

それは、未来をつくれるか。



第1回まちづくり協議会 ～総合戦略の更新となめがた市民100人委員会について～

一般社団法人構想日本

総合戦略更新の基本的な考え方

「行方市総合戦略※」更新における特徴 ※以降、「戦略」と表記

1. 戦略を作る「過程」を重視 ～無作為に選ばれた市民が中心となって策定～
 - 作るプロセスに幅広い市民が参加することで、市民の生活実感に近い戦略を作ることができる。また、市民が行政や地域のことを「自分ごと」として捉えられるようになる。
2. 5年前の戦略策定の流れを踏襲し、検証を重視。
 - 5年前も同様に、無作為の手法を活用し市役所全体の取組みとした。5年前の戦略を軸にしつつ、この5年間の検証作業を行いながらブラッシュアップを行う。
 - 現状把握のため、事前に構想日本が市の各課へのヒアリング調査を実施（構想日本は、5年前も全面的に協力）。
3. 「市民」「外部」「職員」が一体となって実効性のある計画をつくる
 - 総合計画は作るのではなく実行することが目的。そのためには、市民、行政、構想日本が一緒になって5年後の行方市を考えることが重要。

計画の策定・更新ともに、無作為に選ばれた市民を中心と位置付ける手法は全国でも先進的な試み。

前回の総合戦略書策定の総括と変更点

【前回の総合戦略策定プロセスの総括】

1. 行政と接点のあまりなかった多様な市民を巻き込み、参加市民に多くの変化をもたらした
 - 当時の100人委員会のメンバーが中心となって「一般社団法人行方プライド」が結成されたり、有志メンバーによる定期的な勉強会を実施（構想日本も参加したこと有）。
2. 職員の負担が増大した
 - 新たな手法での実施であったことに加えて、並行して「事業レビュー」も行ったため全庁的に業務量が増えた。他の業務とのバランスを図ることができなかった。
3. 先駆的な手法であったため、多くのメディアに注目された
 - 構想日本が把握しているだけで、10の媒体に取り上げられた。



【前回のプロセスからの変更点】

1. 無作為に選ばれた市民の議論を中心に置くことは継続。
2. 前回は市民の声が詰まっている総合戦略を作成した一方で、市職員の声を取り入れるプロセスが不足していたので、今回は、職員が自らの業務を自分事化して考えるプロセスを導入し、市民と共に作り上げる総合戦略を目指す。

なめがた市民100人委員会の概要

(参考) 市民参加型(行政への市民参加)の手法

これまで

公募方式

広報紙等で募集し、市民からの応募によって決める方法。

<特徴>

意識の高い人の声を聞くことができる一方で、利害関係者が手を挙げたり、参加者が特定の人に固定化する傾向。

推薦・一本釣り方式

団体からの推薦や首長の一本釣りで決める方法。

<特徴>

専門性の高い人や地域の有力者を選ぶことができる一方、毎回団体の長を選ぶことによる形骸化や参加者の固定化などの課題あり。

これから

公募方式

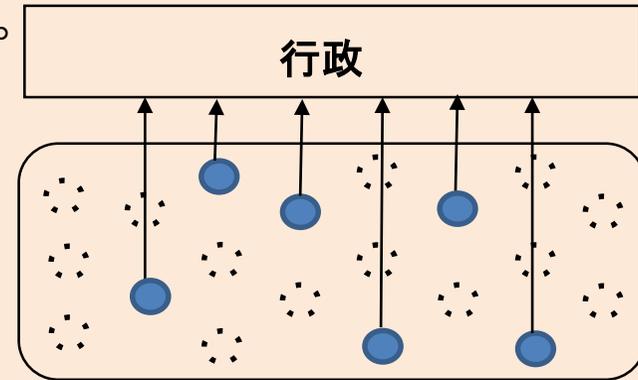
推薦・一本釣り方式

無作為抽出方式

無作為で抽出した市民に案内を送付し、その中の希望者が行政の取組みに参加する方法。

<特徴>

行政と接点の少なかった人、参加を躊躇していた人など、広範な市民の参加を望める。



参加手法を一つ追加するだけで、市民と行政の距離が大きく近づくことが期待できる。

なめがた市民100人委員会について

【目的】

- 総合戦略更新にあたり、市の課題とその解決策や強みをさらに伸ばすための材料を出していく。
- 身近な問題を政治・行政任せにはせず、市民自らが行方市や地域のことを自分事として捉えられる。

【基本的な考え方】

1. 参加する市民の選び方が無作為抽出

- 住民基本台帳から、無作為に市民(3000人)に案内を送付し、応募のあった人が委員として参加する。

2. 地域の課題について、生活から見える現象をもとに市民間で議論

- 進め方のシナリオは一切作らない。参加する市民の発言から論点生まれ、議論を発展させていく。
- 行政への批判ではなく提案するための議論になるよう、外部の人間がコーディネーターを務める。コーディネーターは安心して議論できる環境を作る。

3. 「個人でできること」「地域でできること」から考える

- 行政への要望に終始するのではなく、課題解決のために自分たちでできることから考える。
- 「言いつぱなし」で終わらないように、参加者は具体的な課題とその改善策を記入する。

【構成】

- ① 100人委員会委員：テーマに関し、普段の生活から感じることなどをもとに市民間で議論する。
- ② コーディネーター：議論の進行・論点整理役。構想日本が選定
- ③ ナビゲーター：議論を行う際の専門的視点からの論点提示役。構想日本が選定。
- ④ 審議員：担当課との議論から課題や論点を浮き彫りにする。構想日本が選定。

市民の生活実感が議論の入り口 「何をすべきか」ではなく「自分はどうか」の議論

なめがた市民100人委員会のおおまかな流れ

無作為抽出

R2年9月

<第1回>

趣旨共有・現状把握(把握)

- 委員会や市の全体像の共有
- 自己紹介、テーマに関し一言
- テーマごとに、5年間の進捗状況の把握

R2年11月

<第2回>

テーマについての議論(発散)

- 第1回で共有した現状を踏まえ、委員が日常生活で感じる課題やその改善策などを議論する。
- 議論した内容を最終的に「改善提案シート」に記入する。

R2年11月～R3年3月

市担当課ヒアリング

- 現行総合戦略の11の基本目標ごとに「ありたい姿」を掲げ、現状からありたい姿に近づけるための課題を分析する。

再構成

R3年5月

<第3回>

基本目標の論点整理・課題出し

- 担当課ヒアリングの結果をふまえ、コーディネーターと2～3名の審議員(テーマに関連する専門家)が、担当課との議論を行い、基本目標の課題や論点を浮き彫りにする。

R3年6月・7月

<第4回・第5回>

論点の議論・深掘り

- 第3回の議論から見てきた課題について、100人委員会に参加する市民同士が議論し、「個人」「地域」「行政」「その他民間等」ができることについて「改善提案シート」に記入する。

R3年8月

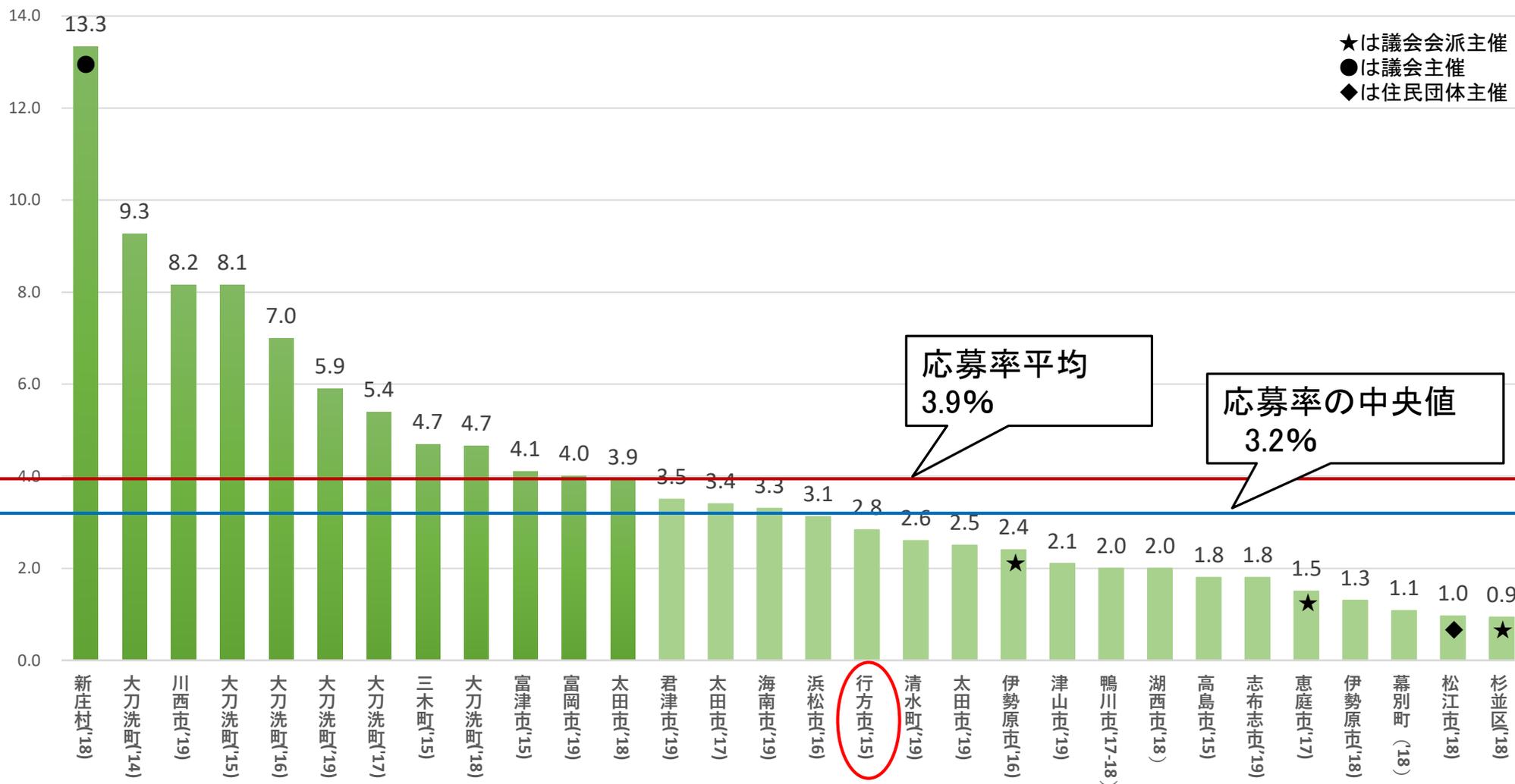
<第6回>

総合戦略素案の議論

- 100人委員会の改善提案を踏まえて作られる計画書素案について議論。
- 100人委員会での議論の「エッセンス」が盛り込まれているかどうかなどの確認

新型コロナウイルス感染の状況によっては、**オンライン会議開催も検討**。

住民協議会の応募率



自治体による応募率の差が大きい。今回は3,000人を抽出して79人の応募、応募率2.6%。5年前とほぼ同じ。

改善提案シート

改善提案シート

第 分科会

名前:

あなたが考える現状の課題

その課題を解決する方法

<p><例></p> <p>公園が利用されていない</p>	<p>(住民の役割)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人として 知らない公園が多いので把握する ・地域として 草刈りなど、公園整備のサポートをする 休憩用のベンチを提供する
	<p>(行政の役割)</p> <p>まちの中にある遊び場のマップを作成する</p>
	<p>(その他)</p>

あなたが考える現状の課題

その課題を解決する方法

100人委員会において議論をする中で参加委員が考えた現状の課題を記載。

<p>100人委員会において議論をする中で参加委員が考えた現状の課題を記載。</p>	<p>(住民の役割)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人としてできること 	<p>自助</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域としてできること 	
	<p>(行政の役割)</p>	<p>公助</p>
	<p>(その他)</p>	

その課題を解決するにあたり、個人、地域、行政それぞれが取り組むべきことを記載。

各班のテーマ

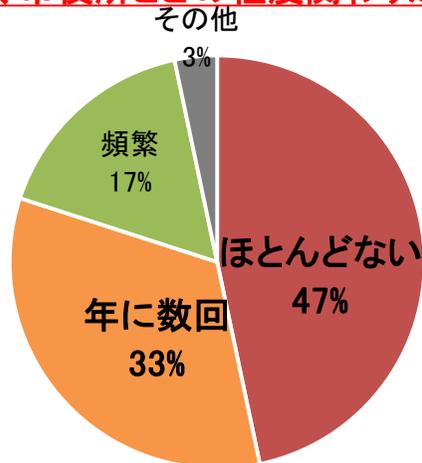
5年前に作成した総合戦略の基本目標を基に
3つの分科会を形成

働く場の拡大プロジェクト		第3分科会
01	基幹産業である農業を盛り上げる	
02	地域に根差した産業を活性化し、「働く場」を確保する	第1分科会
健康で文化的なまちプロジェクト		
03	日本一「元気で包容力のある地域」をつくる	
04	市民の不安と不満を一掃する医療体制を構築する	
住みやすい地域プロジェクト		
05	住みやすい環境を整備する	
06	市民のニーズにあった公共交通を実現する	
07	公共施設、インフラを持続可能にする	第2分科会
みんなで育むプロジェクト		
08	子育てしやすい地域にする	
09	行方の特色を生かした教育を行う	第3分科会
10	子どもを産みたい希望を叶え、住みたいまちをつくる	
情報発信で日本一プロジェクト		第3分科会
11	全市民が情報発信減となり、情報発信日本一の市を目指す	

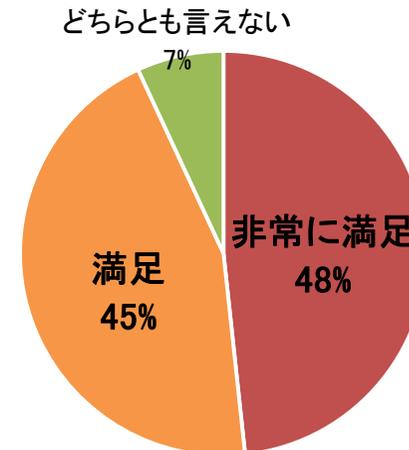
3つの分科会ごとに、新たな総合戦略の基本目標も含めて、市民同士で議論

(参考) 総合戦略策定に関わった市民の変化①(行方市アンケート結果)

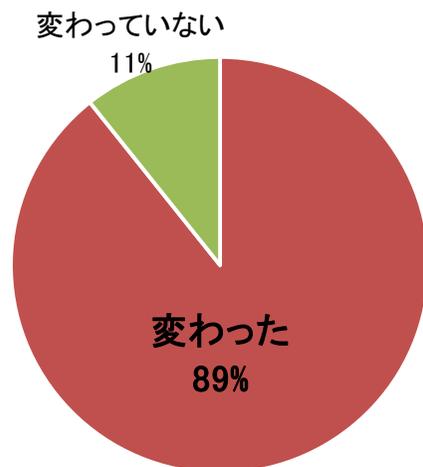
参加以前に、市役所とどの程度関わりがありましたか



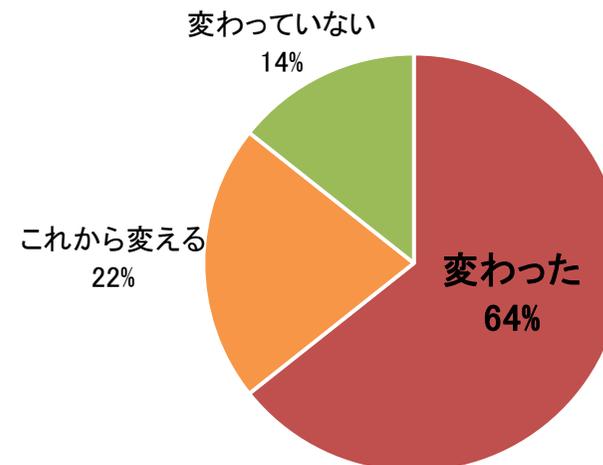
参加してみてもいかがでしたか



市政に対する自身の意識に変化はありましたか



市政に対する自身の行動に変化はありましたか



○H27行方市「なめがた100人委員会」に委員として参加した市民へのアンケート結果より

無作為抽出は、「意識は高いが、接点のない住民」を巻き込むことができる手法。

(参考) 総合戦略策定に関わった市民の変化②(行方市アンケート結果)

意識の変化(H27なめがた市民100人委員会)

1. 市のために自分は何ができるのか、何か役に立ちたい。
2. この半年間、これほど自分のふるさとのことを考えたことはなかった。
3. 世代の違う方々と同じテーマについて様々な角度から意見を聞いて、「自分だったらどうするか」を考えることができた。このような取り組みに参加したことのない、新しい人を巻き込めるよう私自身も何かしらの形で関わり続けていきたい。
4. 市の未来像をディスカッションすることが多くなり、市の発展のあり方を話すことが楽しくなった。

行政側のメリット(他自治体事例)

1. これまでアプローチできていなかった層の意見を聴くことができる。
2. 参加した市民と行政の関係性の構築
 - 参加した市民が、行政・地域を「自分事」として捉えることになり、行政・地域にとっての応援団となる。(例. ボランティア活動者の増加)
 - 計画策定後の各事業を実行する段階においても、市民との情報共有や対話が促進される。(例. 兵庫県川西市「かわにし協働プレーヤー」)

行動の変化(H27なめがた市民100人委員会)

1. 参加した市民の有志メンバーが中心となって、地域活性化を目的とした一般社団法人を立ち上げた。
2. 100人委員会の「第2分科会」の有志メンバーで定期的な勉強会を開催。先進地視察なども実施。
3. これまで利用していなかった市内のお店を利用する機会が増えた。

「他自治体事例」

1. 自発的に「OBOG会」を結成。定期的に勉強会や交流会を開催(案内状の作成や発送など準備はすべて住民)。毎年度住民協議会を行っており新たにOBOGになった人も随時加入。「タテのつながり」もできている。(福岡県大刀洗町)
2. 総合戦略の策定にかかわったメンバーで地域の魅力を再発見する会を結成し、戦略に書かれていた「かわにしカルタ」(遊びながら地域の歴史を学ぶツール)を作成。市のホームページで紹介。(兵庫県川西市)
3. 参加したことで、心の病を患った自分の経験を活かせることもあると感じ、子育ての悩み相談に関するサークルを立ち上げた。(群馬県太田市、30代女性)

継続的に議論すると、意識にとどまらず行動の変化が大きくなっている。